
 学 会 記 事

第64回新潟臨床放射線学会

日 時 昭和63年9月10日(土)

午後2時より

会 場 ホテル新潟 飛翔の間

一 般 演 題

1) 腫瘍内出血をきたした若年者の髄膜腫の1例

横山恵美子・登木口 進 (新潟大学歯科)
放射線科伊藤 寿介 (新潟大学)
放射線科近藤まり子 (同)
脳神経外科武田 憲夫・小出 章 (同)
脳神経外科高橋 均 (同)
実験神経病理

髄膜腫からの出血はまれとされているが、頻度の少ない若年者の髄膜腫で腫瘍内出血をきたした症例を経験したので報告した。CT, MRI 所見からは内部に出血を伴い緩慢な発育をする extra-axial の腫瘍が考えられたが、脳血管造影では血管増生、腫瘍濃染像など髄膜腫を示唆する所見を欠いたため術前診断に苦慮した。組織所見では fibroblastic type の髄膜腫であり、腫瘍細胞の間に出血が認められた。壊死と壁の肥厚した静脈様の血管の集簇像がみられたが、これらの部分には出血はみられず、組織所見から出血の原因を推定することは困難であった。

2) 側頭骨内顔面神経鞘腫の1例

近藤まり子・横山恵美子 (新潟大学歯科)
放射線科登木口 進・伊藤 寿介 (新潟大学)
放射線科

今回我々は側頭骨内顔面神経鞘腫の1例を経験したのでCT画像所見を中心に報告する。

症例: 68歳 男性 主訴: 右難聴, 右耳鳴右顔面神経麻痺 現病歴: 1970年頃より右耳鳴出現. 1972年頃から右難聴出現. 1987年6月顔面神経麻痺出現. CT 所見: 右鼓室を充満し右外耳道に突出する soft tissue density lesion を認める. aditus ad antrum から antrum にも lesion は広がっている. 鼓室上壁の tegmen tympanicum も破壊されている. 手術所見: 顔面神経から出る灰白色の腫瘍が facial recess, tympanic cavity,

mastoidantrum を充満していた. 顔面神経鞘腫の CT 所見は錘体骨の破壊を伴う腫瘍性病変であり腫瘍と錘体骨破壊の範囲が明瞭に把握できることから術前検査として有効であると考えられる。

3) 下顎骨に発育した神経鞘腫の1例

坪田 雅代・林 孝文 (新潟大学歯科)
中山 均・佐々木富貴子 (放射線学教室)
中村 太保・伊藤 寿介

今回、私達は、34才男性の下顎骨に発育した神経鞘腫を経験したので報告する。

初診時のパノラマX線写真において下顎骨正中部に境界明瞭な骨透過像が見られた。単純、造影 CT 検査を施行すると下顎前歯部に骨欠損が認められ、内部は不均一に造影された。又、頬舌側の皮質骨は、ひ薄化しており頬側への骨膨隆が認められた。生検時の病理組織像から神経性疾患の可能性が示唆されたので、再度 CT 検査をした。この際、下顎管と前歯部の病巣との関係を明らかにするため RBL に対し45度の角度をつけて撮影した。これにより下顎管は前方で拡大しており更に前歯部の病巣と連続している事が認められた。以上より私達は、下顎骨中心性の良性神経性腫瘍と診断した。

今回の症例に対し、CT は病巣の進展範囲、内部性状、origin の把握に有効であった。

4) 80歳以上の脳内出血について

登木口 進 (小千谷総合病院)
神経内科伊藤 寿介 (新潟大学歯科)
放射線科

昭和57年5月より63年8月までに経験した80歳以上の脳内出血(21例)について臨床・放射線的に、50歳代(31例)と対比検討した。

いずれの年代でも視床・被殻部の出血が大部分を占めたが、80歳代では圧倒的に女が多く(16/21)、50歳代では男が多かった(26/31)。

致死率は80代のほうが高く(大出血が多い)、視床・被殻部の出血に限ると、80歳代では、更に高かった(6/16)。また視床・被殻部の出血は非常に小さなものから大出血までみられ、特に80歳代に特徴的な CT 所見はなかった。

皮質下出血は4例に見られたが、1例は動脈瘤によるものと考えられた。他の3例は前頭葉(2例)、後頭葉(1例)であった。80歳代の皮質下出血では Amyloid angiopathy も原因として考える必要があることを述べた。